



あとかたづけ

1月27日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

1月27日のおはなし「あとかたづけ」

本当に勝手な人だったから、姉からの電話で死んだと聞かされても「そうか死んじゃったか」と思っただけだった。泣きもしなかったし動揺もしなかった。これでやっと振り回されずに済む、そう思っただけだった。電話の向こうで姉が泣いているようなので私は少し意外に思った。母に対しても、姉に対しても、私に対しても、あの人は迷惑をかけ通しだったから、とてもじゃないが悲しむ気持ちになれなかったのだ。

母と別れた後、何人かの女性とくっついたり離れたりした挙げ句に、一緒になった人がいると聞いていたので、お葬式も何もそっちでやったのだと思っていたら、聞くとその人とも別れて晩年は一人で暮らしていたらしい。そして身寄りのない老人として福祉課の方で火葬されたらしい。どこまで迷惑をかけたら気が済むんだろう。お葬式らしいお葬式もできなかったという。いろいろ終わったあたりでようやく私たちの連絡先がわかり、通知が来たということらしい。「部屋の片付けや遺品の整理をどうしますか」と。

自由に動けるのは私しかいなかったのだから、結局私が向かうことになった。父が最期の日々を過ごしたという家に。それはいつの時代のものとも知れない、文化住宅と呼ばれたタイプの古い古いアパートだった。壁は苔むして元の色がわからなくなっていた。父の部屋に上がる階段はどこもかしこも錆びていて、いくつかの段は外れてしまうのではないかと思えた。ここで父は生活保護を受けていたという。父が気の毒というのではなく、ただその惨めさに胸が痛くなった。

202号室の前に立つ。父の姓が書かれた紙が表札代わりに貼ってあり、飴色に変色したセロテープでべたべたと貼られていた。紙のふちはぼろぼろになっていた。中に入ると、一瞬、もう片付けた後なのかと錯覚するほど物がなかった。薄いカーテン、やかん、ご飯茶碗、小さな棚に何冊かの古ぼけた文庫本。そして背の低い書き物机の上には何冊ものノート。手に取って、ぱらぱらとめくり、そうか、最期まで書き続けていたんだとつぶやいた。そう。父はある時期までそれなりに売れた作家だったのだ。

もともと調子のいい人だったから、売れっ子になってちやほやされるようになって、どこかで何かが狂ってしまったのだろう。父が関係を持った女たちの中には、父とうまく行かなくなると、どういふつもりなのか私たちのところに無理難題をふっかけにくるのもいた。そういう理不尽な目に合う母を見ながら私は育った。あんな卑しい女にだけはなりたくない。そして別れて後までも母を苦しめ続ける父を絶対に許さない。そう。晩年が気の毒なことになっていたからってどうだというのだ。やりたい放題やってきて。

片付けるような物はほとんどなかった。手書きのノートは持って帰るとしよう。本は古本屋に持って行くほどでもないのだからゴミに出そう。本棚もやかんも食器類もゴミだ。袋に入れて出しておけば、持って行きたい人は持って行くだろう。それから書き物机の前の壁に貼られた紙を見て、そこに書かれた文字を見てわたしは息をのんだ。それは本当に突然やってきた。全く忘れていた情景がまるでついさっきのできごとのようにありありと蘇ってきた。

私は5歳で、昔の家にいる。夜で、もう寝る時間だ、でも私は暗い廊下をとたとたと歩き、突き当たりの父の部屋を覗き込む。デスクに向かって父は何か作業をしている。母から聞いたところでは、父は何か追われていて、それはとっても怖いものらしい。私は驚いている。あんなに強くて大きくてかっこいいおとうさんをあんなに怖がらせるなんて！ それは一体どんなオバケなんだろう？ いたずら心でそっと父に忍び寄り、私は作り声を出して言う。

「おとうさん、しめきり～」

それを聞いて父は大袈裟に反応する。

「しっしめきり！」本当は私が近づいてきたのもとっくに知っているのだ。「しめきりが来た！」

わたしは調子に乗って父に迫る。

「しめきりだぞ〜」

父は目を見ひらき、恐怖の表情を見せる。私はその顔がちょっと怖い。でも続けて父が「うわー！ やめてくれー」と変な声を出して苦しがってみせるのでおかしくて仕方ない。だから私は笑って笑って笑い転げる。笑い転げて座っている父の上に倒れ込む。父が私を抱き上げて膝の上に座らせる。父が言う。

「しめきりがこんなおばけなら、おとうさんは頑張れそうだな」

そして父のデスクの前の壁に、一枚の紙が貼られていたのだった。

アパートの、書き物机の前の壁に貼られていたのはその時に見たのと同じ紙だった。父の筆跡で書かれた「締切り」の文字の下には当時の締切りの日付がいくつか。30年もの時間を経て、色が変わり縁は痛んでいたけれど、あの時の紙だということは一目見て分かった。なぜならそこにはこう書いてあったからだ。5歳の子どもの筆跡で7文字。「しめきりおばけ」。

(「締切り」) ordered by shirok-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

● [「SFPインデックス」](#)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

あとかたづけ

<http://p.booklog.jp/book/43140>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43140>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43140>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.